

---

# Square

A k I r A

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Square

### 【Nコード】

N5872S

### 【作者名】

AkIra

### 【あらすじ】

過去の恋に縛られて前に進めない女と彼女を取り巻く3人の男。4者4様の気持ちが交錯する。

## # 1：追憶

『待つて…!!』

追いかけて掴んだ制服。  
君はゆっくり振り返った。

『何…?』

『謝り…たかった、』

君が笑う。

優しい笑顔に、胸の痞が取れていくのを感じた。

『もう、良いよ…セージ。』

『柳…ッ、』

涙が頬を伝う。

それと同時に、視界が急激に白み弾けた。

「あ…」

見慣れた天井に、先程までの事が夢だと自覚する。  
どうしようもない脱力感に、私は再び目を閉じた。

10年以上も前の事だというのに、その呪縛からは未だ逃れる事が出来ない。

もう、君に会う事すら無いというのに…

- Square -

「おはよー」

「おはようございますー!」

元気良くそう返されて、はやまみどり葉山碧は微笑んだ。

初めて出来た後輩に何だか気恥ずかしさも感じるが、それ以上に嬉しかった。

「元気だね、遊弦は。」

「はい！！それだけ取り柄ですから！」

あきづきゆうる  
秋月遊弦。

4月になって入ってきた新入社員だ。

碧の勤める会社はそこそ大きな医療系企業。  
毎年かなりの数の新入社員が入ってくる。

遊弦はその中でも群を抜いて目立っていた。

ルックスも人当たりも良く、何より仕事の覚えが早い。

周りからも一目置かれている彼は、何故か碧に良くなついていた。

「ねえ、葉山さん！今日暇なら飲みに行きませんか？」

「今日は…中村病院で新製品のプレゼンだ！ごめんね、また今度行こう？」

「残念…次は絶対ですよ！！俺、予定空けてますから！」

「分かった、約束ね？」

嬉しそうに笑う遊弦。

碧も釣られるように笑った。

その時…

「葉山、行くでー」

独特な訛りが響く。

振り返れば、出入口の所で先輩である御堂高志<sup>みどうたかし</sup>が碧を呼んでいた。碧は手元にあつた荷物を纏めると慌てて御堂の元へ走る。

「すみません、御堂さん！」

「良いよ。ってか、お前めっちゃ秋月に好かれてんなあ」

「そう…ですか？」

誤魔化してはみたものの、碧とてそこまで鈍い訳ではない。

遊弦が碧の事を好きな事ぐらいとくに感づいていた。

しかし何故遊弦がそこまで自分を好いてくれているのかは分からないままだ。

碧は可愛いかな細工かに分ければ、可愛いほうの分類には入るだろう。

しかし、美青年の遊弦が一目惚れする程のものが自分には感じられなかった。

だからこそ戸惑うのだ。

「またまた、謙遜してからに。」

「いや、本当に分からない、んです…」

「葉山さあ、可愛いんやからもっと自分に自信持ったらええのに…」  
「…私には、恋愛する資格が無いんです。」

あの春から本気の恋はしていない。

否、出来ない。

碧は顔を伏せ、唇を噛み締めた。

## #2：一目惚れ

一目惚れだった。

入社式の時、中庭で独り佇む姿その横顔を見た瞬間。  
身体中を電気が走り抜ける感覚。  
目が逸らせなかった。

「遊弦ー！」

「あ…翔太、」

「何見てんの？」

一緒に入社式に来ていた友人である真田翔太に声を掛けられ、遊弦は意識を引き戻した。  
声を掛けられ無ければ、そのままずっと彼女を眺めていたかもしれない。

「へえー綺麗な人じゃん。」

「…名前…何だろな…」

「聞いて来いよ、」

「…あ、」

遊弦が動き出す前に彼女は立ち上がった。

そんな彼女に近づいてきたのは、先程の入社式で遊弦が配属される部署の副代表として挨拶していた男だった。

確か名は、御堂高志と言ったか…

もやもやと腹に溜まる暗い気持ち。

しかし、遊弦は状況をなるべく良い方へと考えるように切り替えた。

彼が彼女と話している。

それは、裏を返せば遊弦の配属される部署に彼女がいる可能性が高いという事。

そしてその考えは見事に的中した。

「初めまして、葉山碧です。君は？」

少し低めの落ち着いた声は思った以上に心地好かった。

大きな目が真っ直ぐ自分だけを捉えている。

そう考えるだけで、自分の鼓動が更に早くなるのを遊弦は感じた。

「え、つと…？」

「……！すいません！！俺、秋月遊弦っていいですよ！！よろしくお願  
いします！」

思わず見惚れてしまっていた。

慌ててそれを取り繕おうと遊弦は深く頭を下げた。

若干声を張りすぎたが、それはご愛嬌だろう。

暫くの間があつて、クスクスと碧が笑いだした。

急に恥ずかしくなつて、一気に顔へ血が上つていく。

「……秋月君つて、面白いね」

「え……」

「こんな大きな声で挨拶されたの初めて。」

遊弦は思わず顔を上げる。

口元に手を宛てて笑う碧を見て、更に顔が赤くなった。

ただ、単純に。

碧を『可愛い』と思つてしまった。

「ちなみに、後輩が出来るのも初めて。」

「そつ……なんですか？」

彼女の『初めて』になれた事が、ただ嬉しかった。

「うん、だから此方こそよろしくね。」

はにかみながら、彼女はその細く白い手を差し出してきた。  
手を握り返せば、またふわりと笑う。  
遊弦はその笑顔に、完全に心を奪われた。

それから毎日、必死で仕事を覚えた。  
少しでも碧に近づく為に。

1日でも早く彼女に認められたくて。  
そのお陰か、遊弦は入社1ヶ月で他の同期を完全に追い抜いた。

とは言え、たった1ヶ月で碧と同じ仕事ができるようになるわけも無い。

「葉山ー」

「はいっ！」

また、だ。

明らかに碧は御堂と行動を共にする事が多い。

仕事なのだから嫉妬するのはおかしい。

そんな事は百も承知しているが、どうしても心はざわつく。

「絵になりすぎなんだよ…」

ぼそり、と独りごちて遊弦は机に突っ伏した。

御堂は29歳にして遊弦の所属する課の課長だ。

仕事は勿論出来るし、何よりルックスが良い。

男の遊弦から見ても、だ。

女子社員の憧れの的でもある彼は常に碧を仕事のパートナーに選ん

でいた。

碧は他の女子社員のようにきやあきやあ騒ぐ事も無いし、仕事も出来るのだからそれも道理だろう。

しかし、やっぱり嫉妬してしまう。

自分には出来ない事をやってのける彼に…

「秋月!!」

「っわ!!」

軽い衝撃に遊弦は身を起こす。

其処には丸めた書類を手を持った御堂が立っていた。

どうやらそれで頭を叩かれた様だ。

「見すぎや。」

「へ？」

一瞬、何の事を言われているのか理解出来なかった。

「葉山や、葉山。」

「っ!？」

其処まで切り込んでこられて、遊弦の背中を嫌な汗が伝った。  
しかし御堂はそれを気にした様子も無く続けていく。

「まあ、好きになるんは良い事やけどな…」

「…すいません…」

「ただ…お前には無理やわ。」

御堂が笑う。

しかし、遊弦は愛想笑いすら出来なかった。

「好き好き言うだけやったら、アイツは落ちへんで？」

「御堂さんなら…落とせるっていうんですか？」

「お前よりは、可能性あると思うけど…?」

意地悪く笑う御堂に苛立ちを覚える。

しかし相手は上司。

遊弦はぐっと怒りを飲み込んだ。

「負けませんから……」

「ま、頑張り。ただ……アイツの心は……此処には無いから。」  
「……？」

御堂の言葉に引つ掛かりはあったものの、この時の遊弦にそれを深読みする程の余裕は無かった。

遊弦が御堂の言葉の意味を知るのはいそれから暫くしてからだった。

### #3：動きだす

中村病院にでのプレゼンは無事終わり、二人は病院前でタクシーを待っていた。

隣に座る碧は、ずっと新製品の説明書を読み耽っている。

（真面目…やなあ…）

本当に彼女は真面目だ、と御堂は思う。

他の女子社員は、煩いばかりで仕事はいい加減。

処理出来なかった仕事を平気で碧へ押し付ける始末だ。

それでも彼女は文句の一つも言わず黙々とこなすのだから、上司である御堂も頭が上がらない。

15

しかし、真面目であるがお堅いという訳では無い。

飲みを誘えば大体は参加してくれる程、人が好いのだ。

そんな碧に御堂も好意を寄せていた。

肩に手をまわし、自慢の低音をフル活用して耳元で囁く。

「葉山…」

「何ですか？」

「俺と、付き合わん？」

「御堂さん…何時も言ってると思いますが、その顔で言つと女の子は誤解しちゃいますよ？」

御堂はがくりと項垂れる。

鈍いのか、何なのか。

御堂の言葉を冗談としか碧は受け止めない。

まあ、変に意識されれば仕事がやりにくくなるので好都合といえば好都合なのだが。

（ちょっと切ない…）

見た目には少々自信があるのだが、碧にだけは全くそれは通用しない。

御堂が視線を逸らし、溜め息を吐き出したその時。

バサッ、と碧の手から資料が全て落ちた。

しかしそれを拾う気配もない。

「葉山？」

御堂が碧を振り返る。

碧は強張った表情をして、ただ一点を見詰めていた。視線の先には一人の男。

男も同じように、微動だにせず碧を見詰めている。

初めに沈黙を破ったのは碧の方だった。

「や、な…ぎ…？」

それに釣られるかのように、男も口を開く。

「セー…ジか？」

「…うん やっぱ、柳だ…」

「ああ、久しぶり、だな…」

柳、と呼ばれた男は少し戸惑いながらも碧の前へと歩を進めた。  
碧の表情もどこか戸惑いを含んでいる。

「あのね…柳、私…」

「…分かってる…仕事終わったら此処に連絡して。話、あるんだろ？」

「うん…ありがと…」

携帯電話の赤外線を突き合わせ、二人は連絡先を交換した。  
それ以上は何も言うことなく、柳という男は去っていく。

御堂の心の中では激しく警鐘が鳴っていた。

細身の長身に、漆黒の髪。

人を射殺せそうな目付きなのに、碧に対する態度は柔らかかった。  
目つきの悪ささえ無ければかなりの男前だ。

碧の態度から考えて、きっとあの男との間には何かがあったのだろ  
う。

奪われる…

そう思った。

遊弦も危険だが、あの男はもっと危険だ。

「み…御堂…さん？」

気がつけば碧を強く抱きしめていた。

此处が得意先の病院前だ、とか。

仕事中だ、とかそんな事は一気に頭の中から抜け落ちていた。  
一人の男として。

「好きや…、葉山の事…」

「ちょ…御堂さ…流石にこれは…っ、」

「冗談ちゃうよ。俺、年上やし大人でいよう思ってたけど もう  
無理やわ。」

（アイツは、きっと…この子の心を掻き乱す…やったら、）

「俺のモンになって…？」

その前に。

（俺がお前の心を乱してやる。  
）

#### #4：最悪な日

その日は思えば最悪だった。

階段から落ちそうになった彼女を支えた時に、無理な体勢で足を捻った。

病院に行け、と喚き立てる彼女に『誰の所為だ』と言ってしまいそうになるのをぐっと堪えた自分を褒めてやりたい。

そして、付いていくと言つてきかない彼女を制し一人で病院へ来たものの。

軽い捻挫だと医師には言われ、大量の湿布を処方された。

重い荷物が増えて、金を取られたただけだ。

だから病院なんて来たくなかったのだ、と柳透耶やなぎとつやは心の中で悪づいた。

大体にして彼女は心配性なのだ。

携帯を開けば案の定凄い数のメールと着信履歴。

自分の彼女とはいえ、此れにはいい加減辟易とする。

適当に返事を打つと柳はそれをジャケットのポケットに仕舞い込んだ。

相変わらず足は痛むし、仕方がないからタクシーでも乗ろうかと乗り場へと向かう。

そして柳はそうしてしまった事を酷く後悔した。

バサバサ、と紙が散る音。

それに釣られて視線をそちらへ向けた時、柳の視線は一人の女から離せなくなってしまった。

スーツを来て髪の毛を一つに纏め上げている彼女が恐る恐る柳の名

を口にした。

「や、な…ぎ…？」

それで一気に確信する。

目の前にいる女が誰なのか。

「セー…ジか？」

言葉が震えそうになる。

昔の呼び方で呼んでみると、彼女は照れ臭そうに頷いた。

「…うん やっぱ、柳だ…」

「ああ、久しぶり、だな…」

出来ればこんな形で会いたくなった。

出来る事なら、自分の人生にこれ以上関わって来て欲しくなかった。  
だが、彼女はそれを許してはくれないだろう。

「あのね…柳、私…」

追い続ける様な眼がそれを如実に語っている。

そうなれば柳にはそれを受け止めるしか道は残っていなかった。

「…分かつてる…仕事終わったら此処に連絡して。話、あるんだろ？」

「うん・・ありがと…」

携帯を取り出し赤外線画面を起動させる。

新しい着信を告げるランプが光っていたが、柳はそれを無視した。連絡先を交換すると、すぐにその場を離れる。

彼女の隣にいた男は酷く柳の事を睨んでいたし、何より彼女の前は居心地が悪かった。

『やなぎー！』

『何？』

『そんな顔しても怖くないからね？それより、柳！CD持ってきてくれた？』

『忘れた…』

『残念…じゃ、明日こそお願いね！』

見た目が怖い自分に近づく女子なんて誰も居なかった。  
そついう雰囲気を作り上げたのは自分だし、今更変える気も無かつた。

しかし葉山碧という女は違った。

中学に上がったと同時に引越してきた彼女は、柳に何かと話しかけてきたのだ。

きっと自分はそれが嬉しかった。

出来る事ならこの関係が一生続けばいいと思うほどに。

なのにその関係を壊したのは彼女だった。

酷い『裏切り』だと柳は思った。

だから二度と会いたくなかった。

なのに、どうして会ってしまうのだろうか。

連絡先まで交換して。

「セージ…っ・・・」

否。

本当は会いたかったのだ。

あの日の事を清算して戻れるならば、戻りたいと思っていた。

「本当に…最悪な日だ…」

胸元のシャツを握りしめて、柳はその場に蹲る。  
足よりも今は胸の方が遥かに痛かった。

## #5：早く

強い力で抱きしめられ、耳元に落とされた言葉。  
それは碧を動揺させるには十分だった。

良い上司だと思っていた御堂は今此処には存在しない。  
居るのは男の顔をした御堂高志だ。

彼に好きだ、と言われれば断る女はまずいないだろう。

彼に気がない碧でさえ、この顔と声でこんな事を言われれば動揺しない。

「ちょ…御堂さ、」

「…！」

ハッ和我を取り戻した御堂が慌てて碧から離れる。  
その顔は耳まで真っ赤だった。

「ごめ…！俺、なんちゅう事を…」

「や…そんな…」

「ほんまに…ごめん…アイツと喋ってんの見たら…思わず…」

御堂が余りにも慌てふためいているから、碧は思わず吹き出してしまった。

「びつくりしましたけど、大丈夫ですよ」

普通なら信頼していた上司にこんな事をされれば怒って道理だろう。しかし、御堂の表情を見た瞬間そんな考えは無くなっていた。好意を向けられるのは、悪い事ではない。

「さっきのは、中学の時の…友達です。」

それだけでは無いが、碧は言葉を濁した。しかし、鋭い御堂は直ぐに気がついた様で核心を突いてきた。

「お前が恋愛する資格無いって言うてた原因…アイツ？」

碧が息を呑む。

沈黙を肯定と取った御堂は言葉を続けた。

「やっぱり、な…」

「柳のせいじゃないんです…私がアイツを裏切ったから…」

「葉山…」

言ったら急に涙が込み上げてきた。  
あの日あんな事を言わなければ…

「御堂さん… 此処で解散して良いですか？」

「アイツんところに行くんか？」

「はい…」

今すぐ会いたい。

少しでも早く彼に謝りたい。

碧は御堂に深く頭を下げた。

「…わかった…」

「ありがとうございます！」

「その代わり、カタ付いたら俺との事も一度ちゃんと考えて欲しい

…」

御堂の言葉に碧は顎を引いて頷く。

そしてもう一度頭を下げると、踵を返して柳の後を追った。

（確か、こっちに…）

携帯を弄り、先程交換したばかりの番号を呼び出す。  
数コールした後相手が出た。

『はい』

「柳ッ…今、どこ？」

『仕事、良いのか？』

「もう、今日は終わりだったから…」

『そっか…じゃあ北竜駅のコンビニで待ち合わせよう。』

「うん…」

通話を切ると、自然に足が早くなっている自分に気がつく。  
夢にまで見る程焦がれた相手と漸く言葉を交わせるのだ。  
今は一秒でも早く柳に会いたかった。

「柳！」

「セージ、」

変わらず昔の呼び名で呼んでくれる彼に、また涙が溢れてきた。

「私…ッ、ね…私…」

「落ち着けて。取り敢えず、場所移そうぜ？」

柳が碧の肩を抱く。

大きな手が触れた部分が、火傷しそうに熱かった。

## #6：真つすぐ

中村病院から帰社したのは御堂だけだった。  
その御堂の表情も何処か暗い。  
嫌な予感がした。

「御堂さん…、葉山さんは？」

「葉山は…私用や。」

「私用…って…」

遊弦の胸騒ぎは治まらない。

真面目な碧が仕事途中で帰るなど今まで無かった。  
私用、だと言う御堂の様子もおかしい。

「秋月…？」

「ッ…、お疲れさまでした！」

仕事は既に終わっている。

居ても立ってもいられなくて、遊弦は乱暴にスーツと鞆を掴むと会社を飛び出した。

宛てなんてない。

取り敢えず、中村病院の近くへ向かう事にした。  
タクシーを拾い、中村病院の最寄り駅である北竜駅を目指す。

「葉山…さん…」

しらみ潰しに駅前のお店を見て回る。

動物的な勘でしか無かったが、碧は絶対近くに居るような気がした。

7件目に覗いた喫茶店で、遊弦は自分の勘の鋭さに感謝した。

しかし一歩踏み出すと碧の前に座る男を認め、彼女を見つけた事を  
少しだけ後悔した。

鋭い目付きだが、整った顔立ちの男。

椅子に凭れ、煙草を燻らす姿はモデルのようだ。

「柳は…今どうしてるの？」

「俺は…普通の…会社員。SEやってる。」

「そっか…」

碧の表情は柔らかい。

遊弦が見た事無い表情。

立ち尽くす遊弦など、碧の視界にすら入らないのだ。

苛立ちに胸が締め付けられる。

「ずっと…ね、柳に謝りたかったの…毎日夢に見るくらい、」

「……」

「裏切って、ごめん…本当に、ごめん……」

柳、と呼ばれた男の手がそつと碧の頭を撫でる。  
鋭い相貌を愛しげに細め、彼は笑った。

「もう、良いよ…セージ、」

「柳ッ…」

「仲直り、しよう」

柳の言葉に碧が目には涙を浮かべながら、綺麗に笑った。  
心底、嬉しそうに。

「ありがとう…」

「俺も…ずっと引っ掛かってたんだ…だから、良かった。こうやって会えて。」

「ん…」

碧の目に映っているのは、あの男で。  
微笑みかけているのも、あの男で。

きつと、御堂もあの男を見たのだろう。  
そして、同じように焦っているのだろう。  
遊弦は何処か確信めいたものを感じた。

（だからと言って、引き下がるか…）

「葉山さん…！」

「え…？遊弦…何で…？」

「知り合い？」

椅子に座ったままの柳が遊弦を見上げる。

近くで見ると、その双眸の威力は更に増す。

すくみそうになる足を叱責して、遊弦は柳を睨み付けた。

「会社の後輩。遊弦、何で此処にいるの？」

「葉山さんが帰って来ないから…心配で…」

「それでわざわざ…ごめんね、迷惑かけちゃっ…」

碧が言い切る前に、遊弦はその手を取る。

柳の視線がより一層鋭くなった。

暫くの沈黙があつて、先に目を逸らしたのは柳の方だった。

「誤解すんなよ…？俺…彼女居るし、」

「誤解させるような態度をとってんのはアンタだ…」

「……かもな、」

煙草を揉み消した柳は財布から千円札を2枚抜き出し、それを机の上に置いた。

「じゃあ俺、帰るわ。」

「え…」

「彼氏に悪いし、な」

「違…ッ」

柳の一言に、碧が酷く傷ついた表情をしたのを遊弦は見逃さなかった。

それと同時に、御堂が『お前には無理だ』と言った理由がはっきり分かった。

碧の心は、完全に柳という男へ向いている。  
それをきくと柳も分かっていて、態と碧を傷付ける言葉を吐いている。

なんてずるい男なんだろう、と遊弦は齒噛みした。  
純粹に彼の想いを寄せる碧は、まんまとその術中に嵌まる。

「柳！」

「…ん？」

「また…、連絡して良い？」

「浮気はしないからな。」

「分かってるよ！」

口元に悪戯っ子のような笑みを浮かべ、柳が去っていく。  
その背中を何時までも碧は見詰めていた。

それが悔しくて、遊弦は握ったままだった碧の手を引き上げた。そこで漸く、碧の視線は遊弦を捕らえる。

碧の眼に映る自分は、今とんでもなく醜い顔をしているに違いない。しかしそんな事を気にしている余裕は無い。

柳の置いていった金を碧につき付け、遊弦は自分の財布から取り出した金で会計を済ませて店を出た。

「遊弦！」

「葉山さんは…アイツの事好きなんスね…」

「え…」

困ったように首を傾げる碧を見て、急に遊弦を後悔の念が襲ってきた。

姿が見えないから、と不安になって。

ストーリーまがいな事をして彼女を追いかけて来て。

彼女が好きなのだろう相手に喧嘩を吹っ掛けるような事を言って。

好きな彼女を困らせる言葉を吐いている。

今の自分にもっと冷静さがあつたなら、こんな風に碧を困らす台詞を吐く事もないのだろうか。

こんな泥臭い事をしてしまったのは初めてだ。

しかし、もう後戻りは出来ない。

遊弦は覚悟を決めた。

「俺は、葉山さんが好きです！」

「……」

「入社式の時、一目惚れしたんだ……」

自分のすべての想いを碧にぶつける。

御堂のように、大人ぶって遠慮したりはしない。

柳のように、自分の気持ちを誤魔化して逃げたりはしない。

「好きなんです……こんなみっともない事してしまうぐらい……」

「遊弦……」

「あなたが、好きです……！」

無理矢理抱きしめた彼女の体は少し震えていた。

更に強くその体を抱きしめる事で、遊弦はその震えに気付かないふりをした。

## #7：本心

心臓の音が五月蠅い。

彼女に触れてしまった手が、痺れているような感じがする。

極度の緊張から解き放たれ、漸く柳は詰めていた息を吐き出した。

柔らかい微笑みを思い出し、未だあの日から彼女の心は変わって無いのだと実感した。

『好き…なんだ、柳の事が…』

そう告げられたのは、中学校の卒業式。

顔を紅潮させ、瞳を潤ませた碧はまるで別人のようだった。何時も教室でふざけ合っていた、葉山碧では無い別の誰か。

友達だと、そう思っていたのは自分だけだったのか。

そう思うと、碧の告白は柳にとって酷い裏切りのように感じた。例え、碧にそんなつもりが一切無いのだとしても。

『何で…、そんな事言っただよ…』  
『やな…』

『俺は、お前とずっと…友達で居たかったのに…』

その頃の柳は、恋愛なんてものは知らなくて。  
碧の言葉を受け入れる事すら出来なかった。

『お前には…がっかりしたよ…』  
『柳!』

彼女の言葉を聞く事も無く、柳はその場を離れた。  
謝る事すらも許さずに。

高校は別々に進学した為、その日以来今日まで碧と言葉を交わす事は無かった。  
通学する道は似ていたのも、たまに姿を見掛ける事もあったが柳は無視を決め込んでいた。

当然だ、と思った。  
碧の事を信頼していた自分を裏切ったのだから。

数ヶ月も経てば通学時間がずれたのか、碧の姿を見る事は無くなった。  
それに加えて新しい友人や環境を手に入れた為、碧との思い出も徐々に薄れていった。

高校生にもなれば、柳にも思春期というものが訪れる。

周りの雰囲気流されるまま彼女を作り、高校を卒業するまでには一通りの事は済ませた。

しかし、彼女との初めてを経験する度に脳裏を掠めるのは碧の事。

例えば、今キスしているのが碧だったら。

例えば、今抱いているのが碧だったら…

そんな事を考えてしまう自分に気付いた時、漸く柳は自分の碧に対する想いが恋だったのだと思い知った。

遅すぎた自覚は、後悔となり柳を蝕む。

謝りたいとは思っていた。

柳が謝れば、碧はきっと許してくれるだろう。

しかし、プライドが邪魔してそれは出来なかった。

そして何時しか、このまま碧の事を忘れてしまいたいと考えた。碧の記憶からも消えてしまいたい、とも。

(…俺は…馬鹿だ…)

10年経っても碧は覚えていた。

手酷く傷付けた柳に謝罪する為に。

『ずっと…ね、柳に、謝りたかった…』

柳が謝罪するより先に、涙を浮かべながらそう言った彼女はあの頃のまま…

純粹で綺麗なままだった。

思わず手を伸ばし、彼女の髪に触れる。

その瞬間。

封じ込めていたはずの想いが、再び溢れ出していくのを柳は感じた。

こんなにも、まだ。

情けない程に焦がれている。

傷付けて突き放したのは自分なのに。

『誤解させるような態度をとってるのは、アンタだ…』

遊弦という男が、敵意を剥き出しにそんな言葉を吐き捨ててきた。それは碧の代わりに、柳の不誠実を責め立てる言葉。

きっとあの男は、碧の事が好きなのだろう。

遊弦だけではない。

タクシー乗り場で一緒に居た男も、柳に対し威嚇するような態度で

睨み付けてきた。  
彼もまた、同じなのだろう。

当然だ。

あの暖かさに触れたのならば。  
遅かれ早かれそうなるのは見えている。

「！」

そんな事をぼんやり考えていると、不意に携帯電話が震えだした。  
画面を見れば彼女からの着信。  
少し迷ってから、柳は通話ボタンを押した。

「もしもし…？」

『やっと出た！！何してたのよ！？』

「病院、行けって言ったのお前だろ…？」

『そうだけど！連絡しても返事無かったら不安じゃん…私は透耶の  
事心配して…』

押し付けがましい口調に、少しずつ苛々が募る。  
違うのだ。

碧と彼女は何もかも。

『今どこ?』

「北竜駅…帰るんだよ、」

『帰っちゃうの…?寂しいよ…』

心配だ、と言う癖に結局彼女は自分の事しか考えて無い。

軽いとはいえ足を捻挫している自分に、遠回しにでも家まで来いと言っのだから。

『透耶…?』

甘えた声が厭らしく耳に纏わりつく。

考えれば考える程、何故自分がこの女と付き合っているのか解らなくなってくる。

気付いた時には、口は勝手に言葉を発していた。

「…れよう、」

『え?』

「別れよう…もうお前とは無理だ。」

『ちよっ…透耶っ!?!』

「じゃあな、」

本当に欲しいのは、たった一人の存在。  
無理矢理通話を終了させると、柳は携帯を握り締めた。

## # 8：優柔不断

「葉山さん…俺じゃ駄目ですか…？」

「私、は…」

「アイツじゃなきゃ、嫌ですか？」

切羽詰まった遊弦の声音に、碧は答える事が出来なかった。

柳に会えて、昔の様に戻れて本当に嬉しかった。

それは事実だ。

あの日からずっと柳の事を考え、後悔しながら生きてきたのだから。

告白した事を謝って、仲直りして。

碧にとって、其処までが終着点だったのだ。

その後、柳とどうなりたいかなど考えた事も無かった。

「私には…まだ、解らない…これからどうしたら良いのか…」

「……」

「柳の事は好き…だけど、恋人になりたいのかはまだ解らない…」

何より怖かった。

自分の想いを告げれば、またあんな目で柳に見られるかもしれない。

裏切り者だ、と軽蔑されるかもしれない。  
二度とあんな思いはしたく無かった。

「だったら、俺を選んで下さいよ…」

「遊弦…」

「絶対幸せにします…」

密着していた身体が離れたと思えば、顎を強く引かれた。  
目の前には遊弦の整った顔。  
あと数ミリで唇同士が触れてしまっただろう距離だ。

キスされる…

そう思った瞬間。

『セージ、一緒にCD買いに行かね?』

『良いよー、新曲?』

『2枚同時リリース。1枚ずつ買おうぜ。』

『うん!』

不意に碧の脳裏に浮かんだのは、柳との会話。  
思わず遊弦の肩を押し返してしまった。

「葉山さん…」

「うめ…」

先に進むにしても、前に戻るにしても。  
碧にとって柳透耶の存在は大きすぎるのだ。

「遊弦…時間が欲しいの…」

「アイツを忘れる為の時間なら幾らでも待ちますよ…！でも、アイツに戻る為の時間なんか1秒だってやりたくない！！」

遊弦の真っ直ぐな視線が突き刺さる。

自分の優柔不断さが恥ずかしくて、逃げ出してしまいたい気持ちになる。

そんな気持ちをぐっ、と堪えて遊弦の視線に自分のそれを合わせた。

「遊弦の気持ちは嬉しい。私も、好きだよ…遊弦の真っ直ぐなところ。」

「…ッ、」

「だから、私も貴方に向き合える人間になりたい。」

目の前にある遊弦の顔が歪んでいく。  
何かを耐えるかのように拳を握り締め、目を伏せた。

「本心は、今すぐにでもアンタを押し倒して自分のモノにしたいって…これ以上、アイツの事を考えられなくなれば良いって…馬鹿な事考えてる…」

「遊弦…」

「俺、こそ…アンタに向き合って貰う資格なんて無い…ツのに、」

遊弦が地面に膝を付いた。

先程までの強さは無く、ただ弱々しく彼は踞る。

碧はその背中に手を添えながら、唇を噛み締めた。  
遊弦を此処まで追い詰めたのは自分の弱さだ。

どうにかしたい、と思うのに何も出来る事が無い。  
それが酷くもどかしい。

「遊弦…」

「は、やま…さん…」

「我が儘でごめん…もうちょっとだけ…待って…」

今の自分に言える事はそれしか無かった。

柳の事にしても。

御堂の事にしても。

何も片付いてない今の状況で、遊弦に應える事は出来ない。

これは、今まで人と向き合う事から逃げていた碧への試練なのかもしれない。

真っ直ぐ向けられる好意から逃げて、誤魔化して。

過去の美化された記憶を追い掛け続けていた自分への。

「嬉しかったよ、遊弦の気持ち。」

「なら…良かったです…」

「…帰ろっか…明日も早いし、ね？」

素直に頷いた彼に、自然と笑みが浮かぶ。

思っていた以上に、碧の中で遊弦の存在は大きくなっていたらしい。

「葉山さん…!!」

「なに？」

「少しだけ、手…繋いで良いですか？」

何も答えず、碧はそつと遊弦の手を取る。

今、彼に自分が出る精一杯で答えていきたいと思ったから、握った手に力を込めると、遊弦が嬉しそうに微笑んだ。

その笑顔に。

心の中で、何かが動いた。

碧はそれを何処か他人事のように感じていた。

## #9：意外な存在

御堂が会社を出る事が出来たのは、遊弦が飛び出していったから1時間後の事だった。

立場のある役職はこういう時不便だ、と御堂は溜め息を吐き出す。

本当は柳のもとへ向かう碧を引き止めたかったし、そんな碧を追い掛けて行った遊弦の様に何かしらの行動を起こしたかった。

しかし、立場上仕事を抜ける事は叶わないし、私情を仕事に持ち込む事も本来なら出来ない。

結果、御堂に出来る事は何時も通りの仕事をこなして帰路につく事だけだった。

（損な役回りやなあ…）

もう一度、深く息を吐き出してから御堂は煙草を口にくわえた。ライターで火を灯し、煙で肺を満たせば少しだけ気持ちが軽くなった。

吸い込んだ紫煙を吐き出せば、白く濁る視界。

その時、ベンチに座る見覚えのある姿を見つけ御堂は思わず「あ、」と声をあげた。

相手もその声に反応し、顔を上げる。

「ああ…さっきの…」

「…御堂や。葉山の上司。」

「柳透耶です。アイツから聞いたかもしれないですが…」

「昔の友達、やろ？」

「はは。ま、そんなもんです。」

柳が少し身体をずらして場所を開けたので、御堂は遠慮なくその隣に腰掛けた。

「会えたんか？葉山には。」

「ええ。後輩が来て拐われちゃいましたけど。」

「秋月か…」

その行動力が羨ましくもあり、妬ましい。  
自分には出来ない事だから。

「御堂さんは、そーゆー事出来ない人？」

「…まあ、立場上は出来へんな。」

「損つスね。」

目付きの悪さからもつと無愛想かと思っていたが、柳は意外とよく喋る人間だった。

御堂の表情で思っている事を汲み取ったのか、柳が苦笑いしてみせた。

「よく誤解されるんですよ。無愛想だ、とか。喧嘩売ってるとか。」  
「自分、目付き悪いもんなあ。」  
「アイツだったんです…俺の誤解を解いてくれたの。」

アイツ、とは碧の事だろう。

普段の彼女を見てれば、納得がいく。  
誰に対しても分け隔て無い、その姿を。

「そりゃ、惚れるわなあ…」

その言葉に柳の表情が曇る。

何故柳がそんな表情をするのか御堂には解らなかった。  
碧が好きなのは間違いなく柳で。

そして柳が好きなのも、ほぼ間違いなく碧の筈なのに。

「両想い、ちやうの？」

「その時は…ね、でも俺は、それに気付けなかった。」

「どういう…事や？」

「敵に塩を送るみたいであんまり言いたく無いけど…俺、中学の卒業式でアイツの事をこっぴどく振ってるんすよ…」

意外な言葉に一瞬柳が何を言っているのか理解出来なかった。  
ゆっくり反芻して漸く意味を飲み込む。

しかし、理解したとて沸き上がってくるのは疑問ばかり。

「なん…で？」

先程からまるで小さい子供のように、何故？何で？という言葉を繰り返している気がする。

しかし、それ以外の言葉が御堂の口からは出てこなかった。しかし、それ以外の言葉が御堂の口からは出てこなかった。

そして柳もただ、淡々とその質問に答える。

「俺がガキ過ぎたんです…恋愛と友情の区別もつかない。」

柳がそう言って目を伏せた。

彼も彼なりの悩みを抱えて今日の日至ったのだ。

初対面で彼を睨み付けてしまった事を御堂は少しだけ後悔した。

「まあ中坊なんて、友達と遊んでる方が楽しい年頃やしなあ…」

「…あん時は友達として一緒に居るっていう選択肢しか、頭に無かったんスよね…今更後悔しても遅いけど、」

「つつか、そんな時自覚されとったら、俺らに勝ち目無いやんけ。」

柳の目が大きく見開かれる。

意外と目大きいんやな、なんて事を御堂がぼんやりと考えていると…

次の瞬間盛大に柳が笑い始めたので、御堂は更に面喰った。

「ア、ンタ…、面白、い人…だな、」

「そ、うか？」

「アンタもアイツの事好きなんだろ？普通はあの後輩みたいな反応するんじゃないっすか？」

確かに、碧の事を好きな御堂としては柳の存在は確かに疎ましいものだろう。

過去に彼女が好きだった、そして今でも好きかも知れない相手なんて今更出て来て来られても迷惑以外の何者でもない。

御堂も最初柳を見た時は焦りを感じた。

しかし、実際にこうやって柳と会話してみると全てが全て憎むべきものではないような気がしたのだ。

その点では自分は遊弦より大人なのかもしれない、と御堂は思った。

「実際に話して、そうでもないんかな…って思ってた。」

「そ、ッスか。」

「まあ大人や、っちゅー事やな。」

それが良いのか悪いのかは分らない。

変に考えが大人びていた所で、また損をするかもしれないのだから思うままに行動できれば、とは思うが積み重ねてきた歳がそうはさせてくれない。

それに今更そのスタンスは変えられないし、変えられるものでも無い。

その点で御堂は、遊弦ではなく柳に近い存在なのだろう。  
だから何処となく彼に親近感を覚えるのかもしれない。

「負けへんよ。」

「それは…手強いっすね、」

「俺も本気やから。」

遊弦も柳も手強いライバルには違いない。  
それでも彼女をどうしても手に入れたかった。  
これ程までに誰かに執着した事は今まで無い。  
初めてなのだ、誰かを欲しいと思ったのは。

「迷うなら、迷うとき。」

「…ッ、」

「その隙に俺が奪うから。」

立ち上がった御堂が不敵な笑みを浮かべた。

柳の目は少し戸惑いを含んでいて。

彼はまだ土俵に上がりきっていないのだという事を御堂は確信した。

「ほんならな、」

柳は何も言わなかった。

御堂は込み上げて来る笑いを噛み殺し、駅へと足を進めた。

## #10：虐め

「ねえねえ！昨日葉山さんと秋月君が、手繋いで歩いてるの見たんだけど！！」

「マジで！？」

「あー！私も喫茶店で見たよ！修羅場ってヤツ？相手がまたカッコイイんだよねー」

「やっぱり葉山さんって、面食いなんだねえ」

翌日、出社した碧を待っていたのは好奇の眼差し。

御堂に構われている碧は、ただでさえ女子社員達には良く思われていない。

そんな状況で昨日の一件を見られたのでは、腹を空かせたハイエナに肉を与えたのと同じだ。

忽ち噂は広がり、見下したかのような視線が何処に行っても付きまとう。

「ねえ、葉山さぁん！男を落とすテク教えてよー」

「やっぱ、媚びること？」

（頭…痛い…）

「男漁りにかまけてる暇あるなら、これもやつといてえ？」

「は…？ちょ、藤森さ…」

「皆、葉山さんが、プレゼンの資料作りやってくれるって」

「マジ？超助かる」

リーダー格は碧と同期入社してきた藤森という女子社員。

その一言を皮切りに、女子社員達が口先だけの感謝を述べては碧の机に書類を次々積み重ねていく。

立派な虐めだ、と碧は肩を落とす。

何時もなら止めてくれる御堂は生憎明日まで出張だ。

遊弦も職員研修で神奈川へ行っている。

仮に二人が居た所で、その手を借りようとは思わないが…  
諦めて碧は山積みになった資料へ、手を伸ばした。

「間もなく駐車場が閉まります。車を預けている方は…」

社内放送が流れる。

この放送が流れるという事は、時刻が20時になったという事だ。

何時間かぶりに碧は顔を上げた。

碧がいる場所以外は既に暗く、何だか別世界の様だ。  
時間を認識すると、急にお腹が減りだす。

何かを口にしよう。

そう思い、立ち上がった時…

「あ…れ…？」

身体が鉛の様に思い。

意思に反して体は床へと吸い寄せられていく。  
自分の身に何が起こっているのか、理解する間もなく碧の意識は暗転していった。

「ん…」

「…い、おいっ！…！」

「う…やな…ぎっ？」

見慣れない天井。

心配そうに眉をしかめた柳。  
それを認識した瞬間、碧は飛び起きた。

「っ！？何で…？」

「携帯、かけたんだけど繋がらなくて…仕事かと思ってたんだけど余りに遅すぎるから…」

確かに10時を過ぎても連絡が取れないのは幾ら何でもおかしいだろう。

そう考えた柳は、昨日碧が持っていた資料に書かれていた製薬会社の名前を頼りに碧の居場所を突き止めたのだという。

「そしたら…お前、床に倒れてるし…」

「そ…なんだ…」

「お前の家解らないから、取り敢えず俺の家に連れてきた。」

見慣れない天井だと思っていたのは、そのせいか…

そうだとしたら、長居は出来ない。

彼女にこんな所を見られたら、誤解されてしまうに違いないから。  
起き上がろうと腕に力を入れた…つもりが…

「あ…れ？」

体は持ち上がらなかった。

柳の手が伸びてきて、碧の肩を掴むとそのままベッドへと身体を押し倒した。

「熱、あんだよ。寝とけ…」

「でも…っ、彼女が…」

「いねえよ…」

柳の言葉に碧は目を見開く。

昨日は確かに彼女が居る、と言っていたのに。

「昨日別れた。だから…お前が気に病む事は無いから、」

「柳…」

「そんな状態で帰す方が後味悪いし…」

碧の肩まで布団を引き上げると、柳はその横に腰を下ろした。まだ納得はいつてないが体は動かない。

諦めて碧は瞼を下ろした。

「明日は仕事か？」

「ううん、休み。土日は基本休みだから…」

「そっか…なら良くなるまでゆっくりしてけよ。」

「でも仕事…」

「言うと思った。」

柳が優しく笑う。

昔に良く見た笑顔だ。

「やっといたよ。製品の資料作りだろ？」

「嘘…」

「それでもS Eだから、パソコンは得意なんだよ。お前のメモ書き見ながら作ったし…」

柳が取り出したのは、碧が製品のパンフレットにメモ書きを施したものだ。

碧の癖で、新製品のパンフレットを貰うとまず其処に伝えるべき事や特徴を走り書きするのだ。

そしてそのメモを見ながら資料作成をするのだが、パソコンが余り得意ではない碧は何時も其処で苦労していた。

確かに今回押し付けられた仕事も先に資料に目を通してメモ書きを取っていたのだが…

「新商品の心血管留置ステント、心血管拡張バルーンにワイヤー。それと、降圧剤に抗血小板薬の5種類。間違いないな？」

「…う、ん…」

「じゃあ、全部出来てる。安心して寝ろ…」

柳の手が碧の頬を撫でる。

その冷たさが心地好くて、碧の意識はいつの間にか闇に引き込まれていった。

## # 11：告白

安らかな寝息を立てる碧に安心して柳はリビングのソファへと移動した。

ローテーブルに置いてあるパソコンの前に座る。

作成した資料とスライドを、新しいUSBに保存した。

それにしても、だ。

いくら有能とはいえ、一気に5種類もの製品資料を作らせたりするだろうか…？

柳は山のように積み上げられた資料を見詰めた。

無理矢理やらされているのだとしたら、立派な虐めだ。

その時、不意に携帯電話の着信音が静かな部屋に響き渡る。

柳のものじゃない。

と、なればこの部屋に居るのは一人しかない。

悪いとは思いつながら柳は碧の鞆を探った。

画面に表示されていた名前は、『御堂さん』というもの。

柳は通話ボタンを押すと、受話部を耳に押し当てた。

「もしもし…？」

『…誰や…？』

「俺です。柳ですよ、」

『柳くんか…？葉山は…？』

「葉山なら寝てますよ…」

電話の向こうで御堂が息を飲むのが解った。  
確かに今のは誤解を招く言い方だったかもしれない。

「ああ、別に疚しい事はしてないッスよ？」

『…何かあったんか？』

「話がしたくて…仕事終わるくらいの時間に電話掛けたんスけど、繋がらないし…嫌な予感もしたんで、葉山の会社に行ったんスよ。そしたら、葉山が倒れてて…」

『倒れ…って、大丈夫なんか？』

「熱はちよつとありますけど…取り敢えず今は寝てるし様子みてます。」

ほう、と御堂が安心したかのように溜め息を吐き出した。

少しばかりの苛立ちが柳の腹の中には溜まっていて、  
思わずそれを柳にぶつけてしまう。

「アンタの会社では…5種類の新商品の資料作りを、たった1人にやらせんの…？」

『5種類！！？』

御堂の声が大きく跳ねる。

突然耳元で叫ばれ、柳は顔をしかめた。

「ステント、ワイヤー、バルーン、降圧剤に抗血小板薬…アイツの机に資料が山積みになってた…」

『くそ…ッ、アイツらか…』

「心当たりあんの？」

『ああ…先に言うとかけど、アイツに任せたのは新商品のステントだけや。うちの一番花形の商品やしな、…にしても、アイツら…』

御堂が小さく唸る。

どうやら彼も苛立っている様だ。

「多分…葉山の同期の藤森や…他にも数人いるやるけどな…」

「虐めじゃねえか…それでアンタはそれを放置してんの…？」

『何時もなら止めれるんやけど、生憎今は出張中や…』

「アイツは…？」

『秋山は…職員研修や。明日まで解放されへんやろな…』

それで合点がいった。

藤森を含める女子社員達が、陰湿に碧を虐めている。

何も出来ない自分に柳は歯痒さを感じた。

『君が…行ってくれて、良かった…君が行かんかったら、明日の夕方まで葉山を見つけられんかったかもしれんしな。』

その言葉に柳はゾツとした。

あの冷たい床に、碧が1日中放置される姿を想像して。

「何とか、出来ないんスカ…？」

「…余り、俺らが庇いだてすると…余計に彼女らを刺激してまうねん…」

「アンタらが…原因…？」

柳がそう問うと、御堂が押し黙った。

確かに御堂も遊弦も、種類は違うが芸能人顔負けのルックスを持っていた。

女子社員が憧れを抱くのは道理だろう。

そんな彼らが拳こそつて碧に構うのなら、嫉妬の感情は確実に碧へ向けられる。

「…かもな…」

ならば、近づかなければ良い。

そう言ってしまうようになるのを、柳はぐつと堪えた。

そんな事を言える立場に自分も居ないのだから。

「助けて…やってよ…職場はさ…俺、関知出来ないし…」

「…解ってるわ、」

「…取り敢えず、今日はコイツ預かります。資料も作っておいたんで…」

「すまん…何から何まで…」

他の男に好きな女の事を頼むなんて断腸の思いだろう。  
御堂の声が少しだけ震えていて、それを表していた。

『じゃあ…』

「はい、また…」

通話が切れ、部屋に再び静寂が落ちる。

柳は寝室で眠る碧の様子を伺うべく、そっとベッドに近付いた。

穏やかな寝息をたて、定期的に胸が上下している事に安心する。

汗で貼り付いた前髪を優しく指で払ってやると、碧の口元がふわりと笑みを形作った。

「み、ど…り…」

今まで一度も呼んだことのない彼女の名前。  
寝ている時に言うのはずるいかもしれない。  
しかし、今。  
どうしても言いたい衝動に駆られた。

「お前が…好きだ…昔からずっと…」

誰にも聞かれる事の無い告白は、闇夜に融けて消えていった。

## # 12：彼女

瞼の向こう側から射し込む光で、徐々に意識が戻ってくる。  
頭の中が何だかすつきりしていた。

「ん…」

最初に目に入っしたのは、何時もより高い天井。  
視界を巡らせれば、見慣れない家具。

（そういえば、私…柳の家に泊まったんだっけ…？）

理解した瞬間、昨日の事が思い出されてくる。  
無理な仕事を押し付けられ、残業して。  
何か食べようと思った時に、気を失って倒れたのだ。  
その後、柳に助けられてそのまま…

「目、覚めたか？」

「柳…！ありがとう…」

「熱は、もう無いな…」

ひやりとした手が額に当たる。

とても安心する手だ。

「雑炊、食える？」

「えっ……」

「作ったから、食べてくれたら嬉しい。」

「うん……」

「じゃあ持ってくるな。」

キッチンの方へ歩いていく背中。

中学生の頃とは違う。

大人の男だ。

急に、置いていかれてしまったような気持ちになる。

胸の奥がちくり、と痛んだ。

（何で…今更…）

あの日、あの時に。

自分の柳に対する想いは区切りをつけた筈だ。

冷たい瞳に見据えられた時、自分が間違った選択をしたのだと気が付いた。

だから、謝りたかった。

現に謝れば、柳は許してくれたし昔と同じ様な『友人』という関係にも戻れた。

柳が成長しているのは当たり前だし、そんな事ぐらいで胸が痛むのはおかしい。

「セージ？」

その声に、鼓動が跳ねるのはおかしい。

「どうした？まだ…調子悪い？」

「！？ううん、大丈夫！」

「そっか？」

ベッドサイドのローテーブルに雑炊の入った土鍋を置くと、柳が心配そうな視線を向けてきた。

心拍数が余計に早くなり、顔にまで熱が昇っていく。  
誤魔化すように、顔を俯け柳の視線から逃れた。

「…ッ、美味しそうだね、食べて良い？」

「あ…、ああ。」

折角、また昔の様に仲の良い友達に戻れたのに。  
柳を異性として見てしまえば、また元の木阿弥だ。

「食ったらさ、気分転換に出掛けねえか？」

「…気分、転換？」

「仕事ばっかじゃ息が詰まるだろ？折角の休みなら、遊ばうぜ？」

そう誘われるのは、何年ぶりだろう。

昔は良く二人で出掛けていた。

優しい笑顔を向けられて余計に胸が痛んだ。

友達としてで無ければ、見る事は叶わなかった笑顔。

それを失うのは、やはり耐えられ無い。

「良いの？」

「俺が誘ってたんだから良いんだよ。」

「じゃあ…行く。」

ただ一緒に居たい。

それだけしか、今の碧には無かった。

「じゃあ着替えないとな。」

「シャワーも浴びたいし、一旦帰るよ。後で待ち合わせよ？」

「分かった。じゃあ準備出来たらメールして。迎えに行くから、」

「うん！じゃあありがとう！」

荷物は既に柳が纏めてくれていた。

紙袋に詰められた資料と鞆を抱えると、碧は玄関へと向かう。

パンプスに足をつっ込んだ所で、急に玄関のドアが反対から開けら

れた。

「え……」

「アンタ……は……」

立っていたのは碧と同年くらいの女。

金色に近い髪色。

その髪は肩の上で綺麗に切りそろえられている。

ピンク色に縁取られた唇はぽってりとしていてアンバランスな幼さを感じさせていた。

「透耶の……新しい彼女？」

「私は……」

「アンタの所為で私は捨てられたって訳ね……」

女の目が憎々しげに細められる。

そして漸く、この女が別れたと言っていた柳の彼女であるのだと理解した。

「セージ？どうかし……」

「透耶……」

「詠美……」

「納得いかないから、来ちゃった。余計納得いかない事になっちゃったけど……」

そう言っただけで彼女はちらりと碧を見やった。  
完全に敵視されているようだ。

「あの…私、柳の彼女では…」  
「無いって…？馬鹿にしてんの？」

彼女の形相が歪んだ。

今にも殴りかからんばかりだ。  
慌てて柳が二人の間に、体を滑り込ませた。

「透耶が、何とも思って無い女子を家に入れると思ってるの？」  
「詠美、もう良いだろ…？」  
「私だって入った事無い…！！」

彼女であつた筈の詠美がそう言つて泣き崩れた。  
しかし柳は抱き起こす事も無くそれを見下ろしている。

「…俺はもう好きじゃないんだ…こんな事されるのは迷惑だ。」  
「透耶…！」  
「帰ってくれ」  
「嫌よ！透耶ッ！」

嫌がる詠美を無理矢理押し出し、柳がドアを閉める。

ドアの向こう側では、詠美がまだ叫んでいた。  
柳の眉間に深く皺が刻まれる。

「セージ、ごめん…巻き込んで…」

「ううん…、私は大丈夫。」

「話つけてくるから、リビングで待ってて。」

そう言い残すと、柳はドアの外へ出て行ってしまった。  
碧はずるずるとその場にへたり込む。

ドアが閉まる音が静かな部屋にやけに大きく響いた。

### # 13：伝わる

「どういう事…?」

「一昨日言った通りだ。お前とはもう無理なんだ…」

「それじゃ納得いかないの!」

これ程までに詠美が食い下がってくるとは予想していなかった。

しかも此処で下手に彼女を刺激してしまえば、碧に危害が及ぶ可能性がある。

それだけは何としてでも避けたい。

「お前と別れようと思ったのは、俺の個人的な事情だ。アイツは関係ない。」

「でも、透耶はあの女の事好きなんですよ?」

「…だとしても、お前には関係ない。」

睨み付ければ、びくりと詠美が身を竦めた。

目つきの悪さには自信がある。

「俺を怨むのは良いけど…碧に手エ出したら許さねえから…」

「透耶…」

唇を嚙締め、最後に柳を一睨みすると詠美は踵を返して帰って行った。

理解してくれたかは分からないが取り敢えず当面の難局は去ったか

のように思えた。

柳は息を吐き出し、落ち着きを取り戻すと急に待たせている碧の事が気にかかった。

急いで玄関のドアを開けようとノブを回す。

「！」

勢いよくドアを引けば、其処には茫然と立っている碧がいた。

聞かれてしまった、と思い至り柳は頭を抱える。

はつきり『好きだ』と言った訳ではないが、詠美の質問に否定はしなかったのだから言ってしまったも同然だ。

内に秘めていたかった気持ちを一瞬間かれたくない相手に聞かれてしまったのだ。

それにも拘らず。

次に口を開く時碧が何を言うのか、そればかりを気にしている。死刑宣告を待つ死刑囚の気持ちだ。

「柳……」

「！」

意図せずびくり、と肩が震える。

見遣った碧の目は驚くほど真っ直ぐで、柳は思わず息を呑んだ。

「私は…今でも、柳の事が、好き…」

「セージ…」

「今度は、間違って…無い…？」

抱き締めても、良いのだろうか。

この腕に彼女を。

恐る恐る手を伸ばし、碧を引き寄せた。

耳の後ろで血が脈打つ音が響いている。

「言っても、良いのか…？」

「言って、くれるの？」

碧がふわりと笑った。

多くは望まない、とそう思っていたはずなのに。

手に入りそうだと思った瞬間自分がどんどん浅ましくなっていく。

それでも、彼女が欲しいのだと。

その笑顔が自分だけのものであつて欲しいのだと自覚した。

「碧…が、好きだ…」

その一言を言うのに、何年遠回りしたのか。

考えれば気が遠くなる年月だ。

それでも変わらないで居てくれた碧を、今度こそ離したくないと思

った。

吐き出された言葉にまた碧が微笑む。

今度こそ柳は、彼女を腕の中にきつく抱き締めた。

## #14：通じる

ドアの向こうから聞こえてくるのはヒステリックな詠美の大声と、対をなすように静かな柳の声。

何時までも座って聞き耳を立てているのも悪いと思い、リビングへ移動するべく碧は立ち上がった。

気にならないと言えば嘘になるが、人の別れ話を聞くのは余りに趣味に思えたのだ。

しかし不意に耳に飛び込んできた言葉に思わず碧は足を止めてしまった。

『でも、透耶はあの女の事好きなんですよ？』

『…だとしても、お前には関係ない。』

てつきり否定されるかと思っていた言葉を、柳は否定しなかったのだ。

『俺を怨むのは良いけど…碧に手エ出したら許さねえから…』

しかも自分を別れた彼女から護ろうとしている。

都合良く解釈すれば、柳は碧の事を好きだと思ってしまうような台詞だ。

収まりかけた鼓動が再び早くなっていく。

嬉しい、と思ってしまった。

自分を護ろうとしてくれるその言葉に。

一緒に居る事が出来るだけで良い。

そんな言葉で自分を誤魔化してみても。

柳の些細な言葉や行動で、付けた決心は脆くも崩れ去る。

（一緒に居るだけで良い、なんて嘘だ…）

本心はもっと多くを望んでいる。

友達としてで無く、恋人として傍に居たいのだ。

自分とはタイプが違う詠美を見て、確かに碧は焦りを感じたのだ。

詠美はプロポーションも良く、碧には無い色気を持ち合わせている女性だったから。

気の強そうな瞳も肉付きが良い体も、何もかもが碧と正反対で。

しかし、自分に無い物を持つ詠美は柳に振られた。

それに碧は酷く安堵したのだ。

自分は何て嫌な奴なんだろうと、重く閉じられているドアをただ茫然と見つめていた。

その時。

話が終わったのか、不意にドアが開き柳が入ってきた。

目が合った瞬間気まずそうな表情をした柳を見て。

閉じ込めていた感情が抑えきれなくなるのを碧は感じた。

『…私は…今でも、柳の事が、好き…』

『セージ…』

『今度は、間違って…無い…？』

卑怯な言い回しだっただろうか。

ふ、とそんな後悔が脳裏を過ったが柳に引き寄せられてそんな思いは泡のように消えた。

『言っても、良いのか…？』

『言って、くれるの？』

熱を含んだ視線が嬉しくて思わず笑う。

今度は間違っていなかったのだ。

『碧…が、好きだ…』

あの日聞きたかった言葉を漸く聞く事が出来た。

それだけで今までの年月は無駄でなかったのだとそう思えた。

抱き締められた腕の中で、これ以上ない幸せを碧は感じていた。

## #15：茨の道

どんなに望んだって、手に入らない物だつてある。  
たった1日の研修が終わり、戻ってきた遊弦に突き付けられたのは  
残酷な現実だった。

「呼び出して、ごめんね…」

「良いっすよ、」

碧の表情から、余り良い内容の話では無いのであろう事は容易に想像がついた。

かといって、その場から逃げ出す訳にはいかない。

遊弦は体の横で握られている拳に力を込めた。

「私ね…柳と付き合う事になったの…」

「…」

想像はしていたが、実際に耳にすると想像以上に傷つく。

何かを言わなければとは思うのだが、何も言葉が出てこない。

「遊弦の気持ちには、答えられない。」

「っ…、」

「ごめんね…」

謝らないで欲しい。

余計に惨めになるだけだから。

「葉山さんは、本当にアイツが好き…？」

「うん、好きよ…大好き。」

「そっか…」

『大好き』と言った瞬間、碧が幸せそうに微笑んだ。

そんな顔をされたら、適わない。

諦めるしかないのだろうか。

（諦める…？）

まだこんなに好きなのに。

他の人間の事を想って浮かべる笑顔にすら見惚れてしまう程。

「無理ッスよ…」

「え…」

「まだ、諦めなんてつかない…」

こんな事言っても碧を困らせるだけだ。

しかし、困らせる事でも碧の心を占めたいと思ってしまっ。  
何処までも汚い自分に嫌気がさす。  
そんなふうに思いながらも、口から出てくるのは自分の想いだけだ。

「想っだけでも、駄目ですか…？」  
「遊弦…」

今更言っても何も変わらないのに。  
言葉は止まらない。

「俺は、それでも葉山さんが好きだ。」  
「でも、私は…」  
「分かった上で好きなんです。葉山さんがどれだけアイツの事好きでも、俺の気持ちは変わらない。」

例えこのまま、碧が柳と結婚して家庭を築いたとしても。  
自分でも柳でも無い他の誰かと幸せになっただとしても。  
それでも今の自分の気持ちは動かせないだろう。  
不利なのは最初から承知で彼女を好きになっただから。

「諦めてなんかやらないツスから」

選んだのは茨の道。  
碧の肩越しの姿を、じっと見据えた。

それは一種の宣戦布告。

「アンタ、名前は？」

「柳透耶だ。…お前も名乗ったら？」

「秋月遊弦。」

柳の視線はやはり足が竦みそうになる程鋭い。

しかし、碧を想い続けるには避けて通れない相手だ。息を大きく吸い込み、遊弦は柳に近づく。

「遊弦…っ…」

碧の横を通り抜けて、柳の前に立つ。

「何時か奪い取ってやる。」

「…させねえよ、」

鋭い切れ長の双眸が不機嫌に細められる。

それに遊弦は満足し、そのままその場から離れた。

## #16：あだ名

遊弦が去ってから、柳は心の何処かで引つ掛かりを感じていた。自分達の関係を真つ先に報告したいと、碧が指定したのが遊弦だったという事も。

はつきりと「諦めない」と宣言してきた遊弦の事も。やはりただの先輩後輩の間柄では無かったのだろう。

碧は柳の目の前で遊弦をはつきり振った。それで何もかもが解決する筈だったのに。碧の何一つ、手に入っていない気すらした。

「柳…？」

この腕に抱きしめてみても。まっすぐ見詰められても。

「ごめんね。付き合せちゃって…」

「良いよ、けじめだろ？」

「ありがと…」

微笑まれても、微笑み返しても。

胸の痞えは無くならない。

そもそもちやんと笑えているのだろうか。

この心の内を上手く隠して、彼女を不安にさせていないだろうか。

しかしそんな考えも一瞬にして消し飛んだ。

「柳、なんか…変だよ…？」

昔からそうだったのだ。

彼女の前では何の偽りも通じない。

人と関わることを態と避けていた自分の本質を見抜いてきたあの日から。

「柳の悪い癖。直ぐに抑え込むの…」

「セージ…」

「もう友達じゃないでしょ？…私、柳の彼女なんだから。」

それすらも気付かれていた。

「セージ、見ろよこれ。」

「サッカー雑誌？って言うか、セージって何…」

「此処だって、この選手。」

「葉山、誠二…？」

「そ。だから、セージ。」

「私、仮にも女なのにそんな男みたいなあだ名…」

『友達なんだから、別に良いだろ？』

碧を友達として見るために、男みたいなあだ名をつけた事。

『セージ』と彼女を呼ぶ時は友達としての一線を引いていた事。それに気付いていて尚微笑んでくれている。

「碧…」

「何…？」

「透耶、って呼べよ…彼氏だろ？アイツの事は遊弦って呼んでた…」

言ってから胸の痞えの正体が分かった。

取るに足らない『嫉妬』だ。

碧が『遊弦』と呼んでいた事が、悔しかったのだ。

あの後輩が碧に特別扱いされているように感じて。

「うん…透耶…」

「…！」

名前を呼ばれて、もやついていた気持ちがすうつと晴れていくのを柳は感じた。

「やば…思った以上に照れる…」

「そんな反応されたら、私まで恥ずかしいじゃん…」

「煩い・・・」

コツ、と軽く握った手で碧の額を小突く。

楽しそうに笑った碧を見て、漸く友達から恋人になれたのだという事を柳は実感した。

## #17：優しさ

「そつかあ、良かったなあ」

にこにこと笑いながら、御堂が碧の頭を撫でている。

人目のある社員食堂でそんな事をされると、女子社員の視線が酷く痛い。

居心地悪そうに視線を泳がせた碧に気付いたのは、目の前でうどんを啜っていた遊弦だった。

「御堂さん、手。」

「ああ、悪い悪い。秋月、男の嫉妬は見苦しいでー？」

「良いんスよ、見苦しくても。碧さんが結婚するまで諦めないって決めたんですから。」

「ま、秋月っぽいな。」

「そうやって大人ぶるのは、御堂さんっぽいですよね？」

「…大人、なあ…」

左に御堂、正面に遊弦が座っている。

あの日からどちらか一人が必ず碧の傍に居るのだ。

お蔭で直接的な虐めは無くなったが、陰湿な視線や陰口は相変わらずだ。

周りが気になって、美味しいと有名なAランチの味も分らない。

『また、侍らしてるよー、』

『いかにも姫って感じだよね?』

『うざー...』

気にはしていない。

思えば思うほど、言葉は耳に突き刺さる。

食欲すら無くなってきて、箸をそつとお盆の上に返した。

その時、ガタンと碧の左側で椅子が倒れた。

「…ッ、じゃかあしいんじゃ!」

食堂の誰もが動きを止めるほどの大音量で叫んだのは、御堂だった。

「いい加減にさらせよ、お前ら!! 虐めたり陰口叩いたりするしか能が無いんか!?! ああ!?!」

「ちょ、御堂さ...」

「気付いてないでも思つとるんか!?! 何でもかんでも葉山に仕事押し付けよつてからに...」

普段の御堂とは似ても似つかない。  
怒りを露わにして怒鳴り散らす。

「そんな女が俺はいつちゃん嫌いやねん！」  
「ッ！」

女子社員の真ん中にいた藤森の顔が醜く歪む。  
他の女子社員は今にも泣きだしそうだ。

「今回、葉山に押し付けた分は目工瞑ってやるわ…でも今度同じ事  
しよったら、俺にも考えがあるからな…」

大阪訛りと低い声で御堂が周囲を睨み付ける。  
すると蜘蛛の子を散らすように食堂にいた女子社員達は逃げて行っ  
た。

荒くなった息を整え、御堂は椅子を起こして再び座りなおした。

「スマンな。大人で居れんかった。」

少しバツが悪そうに御堂が苦笑いした。  
碧も遊弦も目を丸くして、そんな御堂を見詰めている。  
先に動き出したのは遊弦の方だった。  
口元を手で押さえ、笑いを堪えている。

「や、すつきりしましたよ。ちよつと御堂さん見直した。」  
「ちよつとかい。もつと見直せや！」

御堂の台詞に今度こそ遊弦が吹き出した。

そんな何時も通りの掛け合いに、漸く碧の表情も緩む。

「あーあ…部長の説教やなあ…」

「名誉の負傷ツスよ。」

「阿呆。別に負傷してへんわ。」

「…あ、私の所為で…」

再び御堂の手が碧の頭を撫でる。

碧が其方を向くと、優しく微笑む御堂と目が合った。

先程まで怒鳴り散らしていた彼とはまるで別人だ。

「あんな、葉山…お前の『所為』やないねん。」

「御堂…さ、」

「お前の『為』に俺がしたかったことや。」

「そうそう。御堂さんがいかなかったら、俺がいつてたとこツスよ？」

「良かったな。お前がいつとつたら説教じゃ済まへんわ。」

気持ちに応える事が出来ない自分に、何処までも二人は優しい。  
しかし逆に無条件に与えられる優しさが辛くもある。

『ごめんなさい』、と言いつうになつてしまつ口を碧は咄嗟に押えた。

謝罪の言葉をこの場で述べるのは、二人にとって失礼だ。じゃあ、何を言えいいのか。

押えていた手を外し、碧は二人を見詰めた。

「ありがとうございます…御堂さん。遊弦も、ありがとう。」

その言葉に、御堂も遊弦も嬉しそうに微笑んだ。

## #18：嫉妬

食事が終わり、仕事へと戻る。

先程の御堂の件がある所為か心なしか皆緊張していた。  
普段優しい人ほど怒らせると怖い、という事だ。

「葉山、悪いねんけどこの資料コピーしてきてもってええかな？」  
「あ、はい！」

御堂に頼まれて、碧は立ち上がる。  
受け取ったのは、碧の代わりに柳が作ってくれた資料だ。

「アイツ、なかなかやるな。めっちゃ見易いわ。」  
「…はい。」  
「内容はお前が考えたんやろ？良く出来とる。」

御堂が笑う。

何を言ったわけでも無いのに、ちゃんと分かってくれている。  
御堂のこういう所が、良い上司たる理由なのだろうと碧は思った。  
碧は深く御堂に頭を下げると地下の印刷室へと向かった。

「良い身分ね…」

碧が振り返ると、壁に凭れ掛かるようにして藤森が立っていた。  
自然と体が強張る。

「藤森、さ…」

「護られて生きていくしか能が無いのかしら？」

長いパーマがかかった髪が揺れると香水の匂いが鼻につく。  
彼女は頭の前から爪の先まで完璧だ。  
しかしその完璧さが逆に噓くさくもある。

「私、そんなつもりは…」

「そうやって弱いふりして、男に護ってもらうのね。御堂さんや秋月が可哀想よ…」

「っ、」

自分の一番ずるい部分を浮き彫りにされ、碧は二の句を告げる事が出来なかった。

そんな碧を鼻で笑うと、藤森はその体突き飛ばした。  
急にそうされた事で碧の体は呆気なく後ろへ倒れた。

「…っ、」

激しい痛みが後頭部に走る。

目を開けると、視界がぼやけていた。

「そこで大人しくしてなさい。」

「う、あ…」

痛む頭を抑えて立ち上がった碧の前でドアが閉まった。  
ご丁寧に鍵まで掛けて。

「嘘、でしょ…」

独りごちて、碧は溜め息を吐き出した。

入社した時から、藤森の御堂に対する執着は凄かった。  
それ程まで人を愛する彼女を碧は羨ましいとさえ感じていた。  
しかし、此処までくると流石に愛情を履き違えている。

後頭部を押さえつけている手には生暖かい感触。  
確かめるまでもない。

「透、耶…」

薄れていく意識の中、最後に浮かんだのは柳の顔だった。

## # 19：嘘

「遅いな…」

時計を見上げて、御堂は呟く。

確かに、印刷を任せた資料は少ない量では無い。  
それにしても、だ。

「御堂さん？」

「悪い、ちよっと席外すわ。」

嫌な予感に駆られ、御堂は部屋を飛び出した。  
地下の印刷室に辿り着くと、規則正しくコピー機が駆動している。  
それに少し安心して中を覗き込んだが…

「藤、森…？」

「あ、御堂さん！」

其処には碧では無く、藤森が立っていた。  
しかも彼女が刷っている資料は、御堂が碧に任せたものだ。  
疑問が頭を埋め尽くす。

「葉山さん、用事が有るからって私に押し付けて行ったんです。」  
「葉山が…？」

「酷いですよねえ？」

ニコニコと綺麗な笑顔で藤森がそう言う。  
しかし、その言葉には違和感しか感じない。

「噓、吐くなや……」

「え……？」

「葉山は頼まれた仕事を投げ出したりせえへん。お前が……何かした  
やろ？」

御堂の言葉に藤森の顔が歪む。

「御堂さんは、葉山を信用しすぎですよ……」

「それはアイツが信用に足るだけの事をしてきたからや。」

「御堂さんは葉山の事も知らないじゃないですか！！あの女、秋  
月と手を繋いでたんですよ？」

詰め寄ってくる藤森の肩を掴み、御堂は視線を合わせた。  
大きな目からは今にも泪が零れ落ちそうだ。

「そうやとしても、仕事とは別や。上司として、俺は葉山を信用してる。」

「上司？男として、の間違いじゃないんですか？」

「…否定はせんよ…好きな人間を信用出来ん奴に、俺はなりたくない。」

真っ直ぐ藤森を見詰め、諭すように話し掛ける。  
居心地悪そうに、藤森が身を振った。

「葉山がどんな奴でも、俺は自分の目で見たアイツに惚れたんや。」

「…っ、」

「頼むから教えてくれ…俺にお前を恨ませんといてくれ…」

顔を伏せた藤森が小さく『ずるいですよ』と呟いた。

スーツのポケットから取り出された小さな鍵。

それは地下倉庫の鍵だ。

震える手で藤森がそれを差し出す。

受け取るうと御堂が手を伸ばした時、藤森が不意に顔を上げた。

「…嫌いに、ならない…で下さい…」

「藤森…」

絞り出された声はか細く頼りない。

「御堂さんに嫌われたら…私…っ、」

「…好いてくれることは嬉しいけどな…今の俺には、おまえの気持ちを汲んでやれるだけの器量が無いねん…」

「それでも、良いんです…私は…」

「ごめん…この話は葉山の無事を確認してからや。」

藤森の絡みつく視線を振り切って御堂は踵を返した。

その後ろ姿を見送ってから隠し持っていた目薬を指で遊ばせる。  
中々手強い相手だ、と藤森は小さく舌打ちをした。  
今までの男達は此処までやれば簡単に靡いたのだから。

「泣き落としても、駄目かあ…」

次の手を打たなければならない。  
藤森は蠢惑的な笑みを浮かべると、エレベーターへと足を進めた。

## #20：失ったもの

藤森から受け取った鍵で、用具室のドアを開ける。  
重い扉を開くと、黴臭い匂いが鼻をついた。  
壁を探り、室内灯のスイッチを押す。

「葉山…？」

明るくなつた室内。

その片隅に、ヒールを履いた足が見えた。

慌てて御堂は駆け寄る。

「おい！？大丈夫か？！」

返事は無い。

抱き起こそうと、御堂は碧の首の後ろに手を差し入れた。

「…ッ、！」

ぬるり、とした感触に思わず手を離す。

離れた右手に付いていたのは、紛れもなく血液。  
嫌な想像が御堂の頭に浮かぶ。

過ぎる想像を頭を振って追い出し、ポケットに入っている携帯電話を取り出す。

震える手で御堂は交換台へと掛けた。

『はい、交換台です。』

「御堂や！怪我人が出た！至急、救急車の要請を頼む！」

『！、場所は？』

「B1、用具室や！」

『畏まりました！』

携帯電話を仕舞うと、碧の口元に耳を近付けた。呼吸音はしつかりと聞こえている。

それに少し安堵を覚え、御堂は息を吐き出した。

しかし予断は許さない。

頭を打っているのは明らかなのだから、不用意に動かすのは危険だ。

守れなかった。

その事ばかりが御堂の頭を埋め尽くす。

碧がこうなってしまったのは、自分の所為だ。

嫉妬に狂う藤森を放置してしまった、自分の。

「ごめん…なあ…」

もつと早く決断すべきだったのだ。  
碧から離れる事を。

何度も考えていた事だった。

嫉妬の対象になってしまった碧を救うには、離れるしかない。

だが、出来なかった。

御堂自身が、碧から離れなくなかったから。

彼女が虐められるなら護れば良いと思っていたし、その自信もあった。

なのに、現実はず違った。

御堂が思う以上に、女というのは強かで計算高い。  
彼女達は御堂の目を盗んでは、碧を傷付け続けた。

「頭では、解つとつたんやけどな…それでも、アカンねん…」

自分が碧から離れれば、解決する問題だった。  
しかしそれは出来なかった。

「俺…は、それでも、お前に居って欲しかったん…！」

目の、

手の、届く場所に。

恋人じゃなくても構わない。

ただ、その存在の傍に居たかった。

「俺の、所為やツ、」

今は祈るしか出来ない。

彼女の無事を。

救急隊が到着するまで、御堂は動かない碧の手をずっと握っていた。

幸い軽い脳震盪だったらしく、碧の身体に異常は無かった。

家族と連絡が付かなかった為、代わりに大まかな説明を受ける。

大事をとって、今日1日は入院するようにと医師には言われた。

もとより、暫くは会社を休ませるつもりだったのでこの提案は好都合だった。

これ以上彼女を危険な目に合わせる訳にはいかない。

上司としての責任だけでなく、男としてもだ。

ふ、と御堂は最も連絡をとらなければならない相手を思い出した。

今の彼女に一番必要な人物。

碧の携帯電話と一緒に持ってきた鞆の中から探す。

そして、『柳』という名前を探し当てた。

番号を表示させ、通話ボタンを押そうとした時…

「御堂、さ…ん？」

「葉山…！」

目を覚ましたらしい碧が、ぼんやりと御堂を見つめていた。

「良かった…！お前用具室で頭打って倒れててんで！」

「用具室…」

「意識戻って良かったわ…取り敢えず柳君に来て貰うわな？」

「え…？」

不思議そうに碧が首を傾げた。

「柳って、誰ですか…？」

「は…？」

御堂の手から携帯電話が滑り落ちる。

碧の言葉の意味を理解出来なかった。

「柳って…？」

繰り返されて漸くその言葉の意味を理解する。

記憶喪失。

それが今の彼女を表すのに一番適した言葉だった。

事もあるつか彼女が忘れてしまったのは、一番忘れたくないであろう人物。

どうする事も出来ず、御堂は唯その場に立ち尽くしていた。

## #21：汚れた感情

「記憶喪失!？」

「声が大きい!」

病院から戻ってきた御堂から聞かされた事実。

驚く遊弦の口を慌てて御堂が塞いだ。

他人に聞かれては不味いからだろう。

特に碧を陥れようとしている女子には。

有ること無いことを吹聴されるかもしれない。

其処まで思い至り、遊弦はこくこくと首を縦に振った。

「それで、碧さんは…?」

「今日は入院やって。記憶喪失やいっても一部だけやし、日常的には問題ないから明日には退院する予定やけど…」

「柳サンは…?」

御堂が首を横に振った。

まだ連絡をしていないということらしい。

「正直…何て伝えたらええか、解らん…」

確かに御堂のいうことは道理だ。

存在を忘れられたなんて、柳にとっては不幸なことこの上ない。

「取り敢えず、柳君には俺から連絡するから…」

「御堂さん…」

「こうなつた俺は俺の所為やからな…」

実際の所、藤森の身勝手な嫉妬が招いた悲劇だ。

御堂には何の責任も無い。

しかし遊弦がいくらそれをこの場で説いたとして、御堂は納得しないだろう。

それに、遊弦にだって思い当たる節が無いわけではない。

自分だって、御堂の立場になり得たかもしれないのだから。

「俺の事は…覚えてるんすか…？」

「ああ…、忘れてるんは柳君の事だけや…」

不意に頭に浮かんだ想像。

このまま柳の存在を忘れてくれたら…。

そんな事を考えてしまった自分に吐き気がした。

碧の事を好きになればなるほど、自分の汚い部分が浮き彫りになる。自分の身体の中にある沈みこんだ泥のような気持ちを自覚する度に情けなくなるのだ。

「お見舞い、とか大丈夫スかね…」

「ああ。俺は諸々手続きせなあかんから、お前だけでも行っといで。  
「ッス。」

手続きとは碧の休暇申請だろう。

確かに今は碧を藤森から離れた方が賢明だ。

これ以上何かをされたら堪ったものではない。

書類作りの為に机に向かった御堂に頭を下げながら、遊弦は会社を後にした。

白いシーツに、白いカーテン。

如何にもな病室で、碧は佇んでいた。

怪我はそんなに酷くは無い筈なのに、1日とはいえ入院を強いられた事に何処か違和感を感じる。

今一つはつきりしない頭に残る1つの名前。

「柳…。」

御堂が電話を掛けようとしていた相手で。

碧の携帯電話に残る見覚えのない名前の主。

「柳、透耶…」

反芻してみても、感じるのは違和感ばかりで。  
段々と気分が悪くなり、碧は目を閉じた。

「碧さん！」

「！、遊弦…！」

見覚えのある顔にホツとする。  
悪戯っぽく笑うと、遊弦は碧のベッド脇にある椅子を引いて其処に座った。

「ドジですよ、足滑らせて頭打つなんて。」  
「なッ、ドジって…！」

むくれてみせる碧に遊弦は思わず噴き出す。  
佇む碧の手を握りその顔を覗き込んだ。

「心配したんですからね、」  
「ごめん…」  
「案外元氣そうで安心しました。」

覗き込まれて碧の顔が赤く染まる。  
その反応が意外だったのか遊弦の方が困ったかのように頭を掻いた。

「何か、碧さんにそんな反応されると照れるんですけど…」  
「う、あ…！ごめん！」

遊弦との距離感に碧は戸惑う。

「だって、…告白され、たばっかだし…」

「え…っ、」

「ごめん、ね…何か、慣れてなくてさ…」

今度は遊弦の方が少し戸惑った表情を浮かべた。

しかし、それも一瞬で直ぐに何時も通りの表情に戻る。

「変に意識される方が恥ずかしいッスよ。普通にして下さい。」

「う…うん…」

そうは言われても、やはり気恥ずかしさは拭いきれない。

碧は遊弦の視線から逃げるように顔を背けた。

だから、気付かなかった。

顔を背けた碧の後ろで、遊弦が浮かべていた苦しげに歪む表情に。

## #22：彼氏

『葉山が、記憶喪失になった…忘れたのは君の事だけや…』

御堂から掛かってきた電話。

内容は非現実過ぎて理解に苦しむものだった。

しかしわざわざ電話してきてまでこんな悪趣味な悪戯はしないだろう。

柳は頭を鈍器で殴られたかのような衝撃を受けた。

「何で、ですか…？」

『俺の所為や…不用意にアイツを1人にした…』

指先が冷たくなっていく。

冷えていく心に比例するようだ。

『うちの女子社員の1人が、彼女を倉庫に閉じ込めたんや。その時に頭をぶつけたらしくて…』

「怪我は…！？」

『頭部の裂傷だけで、傷も大きくない…』

「そう…ですか…」

今すぐにでも会いに行きたい。

しかし会いに行って良いのかも解らない。

今会った所で碧にとって柳は知らない人間だ。  
余計に混乱させてしまうかもしれない。

「こんな事にならないように…アンタに頼んだんだ…なのに、ッ」

柳は唇を血が出るほど噛み締めた。  
鉄臭い味が舌に広がる。

『…すまん…』  
「くそ…ッ、」

謝られると、余計に虚しくなる。  
柳も御堂が悪いのでは無い事は理解している。  
しかし誰かに八つ当たりでもしないと心は保てなかった。

「すみません…取り乱した…。それで、碧は今どこですか…？」  
『中村病院や。512号室…』  
「分かりました…」

電話を切ってから柳は溜め息を吐き出し、頭を抱えた。

漸く手に入れたかけがえない存在。  
それは柳の掌をすり抜けて消えた。

まるで砂浜に建てた砂細工の城のように。  
崩れる時は至極あっさり波に攫われて無くなる。

「碧…」

一目会わなければ納得はいかない。  
柳は手元にあった荷物を掴むと、会社を後にした。

「じゃあ、俺そろそろ帰ります。」

「そっか…」

「寂しいッスか？」

極力明るく。

冗談めかして遊弦は振る舞う。

「馬鹿！誰が！」

「ははっ、その調子なら明日十分退院出来ますね、」

気を抜けば泣き出してしまいそうで。

あれほど迄に『好き』だと言っていた相手を。

何年も回り道して、やっと通じ合えた相手を。

他人の身勝手でいとも簡単に忘れ去ってしまい。

そんな風に弱りきった所につけ込もうとしていた後輩に、そうとは  
知らず縋っている。

碧のそんな様子を見れば、遊弦は何事も無かったかのように振る舞う事しか出来なかった。

そして、また自分の愚かしさを痛感するのだ。

「ありがとう、遊弦…」

「何asca、改まって…」

「遊弦と、ずっと一緒に居れたら…楽しいのかな、」  
「！」

鼓動が高鳴る。

碧はじつと遊弦を見詰めていた。

「遊弦…、」

「あの…」

視線が反らせない。

動くことすら出来ない。

「私と、一緒に…いてくれる…?」

心臓が止まるかと思った。

目の前に居るのは確かに碧なのに。

一緒に居て欲しい、と言っているのも碧なのに。

まるで別人のようだ。

「碧さ…」

「遊弦…」

此处で頷けば、碧は遊弦のものになるだろう。  
なのに、素直に頷けない。

戸惑う遊弦の視界の端で、影が動いた。  
碧もそれに気づいたらしく、2人の視線が其方に向く。

「碧…」

ドアの所で佇んでいたのは柳だ。

何時から聞いていたのか、解らない。

しかしどちらにせよ今の状況は、柳にとって見たくないものだろう。

「どちら様…ですか？」

「ッ、」

残酷な言葉を、碧は投げつける。

柳の表情がますます強張った。

「あの…」

「昔の友達だよ、会って無かったからって忘れる事ねえのに！」

「友、達…」

「丁度通りかかったから、覗いてみただけだ。悪かったな、彼氏との邪魔して。…じゃあな、」

明るくそつまくし立てると、柳は出て行った。

その後ろ姿が痛々しくて。

気付けば、遊弦は彼の背中を追っていた。

### #23：決心と誓い

「待って下さい…！」

追い掛けて、エレベーターの前でその腕を捕まえた。  
しかし、立ち止まった彼は勢い良く遊弦の手を振り払う。

「傍にいてやれよ…！」

「…何、拗ねてんすか…！」

「そうじゃねえ！！アイツを置いてくんなって言っただよ…！！」

強い眼光が遊弦を捉えた。  
落ち込んでいる訳では無い。  
悲しんでいる目でも無い。

「アイツを1人にすんな。泣かすな、不安にさせんな！」  
「…！」

「今の俺には出来ない事だ…だから、お前らがやれ…！」

遊弦の胸倉を掴み、凄みを利かせる。  
相変わらずの眼力だ。

しかし、此処で竦んではいけない。  
遊弦は腹に力を入れた。

「アンタはどうすんの…？」

「俺は…俺のやり方でやる…さっき、アイツの顔を見て、決心がついた。」

「…どういう事…？」

「忘れられたなら新しく関係を築けば良いだけだ。それに…丁度良かったのかもしれない…」

「良かった…？」

柳が言い淀んだ。

少しだけ、瞳の奥が揺らぐ。

彼の隠せない不安を表しているかのようにだ。  
しかしそれは直ぐに消える。

「教えねえよ、」

口元を歪め柳が笑う。

もう、これ以上語るつもりは無いようだ。

「分かりました…戻ります。」

「…泣かすなよ…絶対…」

「はい…」

エレベーターのドアが閉まる。

何だか差を見せ付けられた気分だった。

柳の方が自分よりずっと思慮深い。

我が身よりも、碧の事を真っ先に考えていたのだから。

「負けねえ……」

降りていく階数表示を見詰め、遊弦は1人呟いた。

（昔の友達だよ、）

その笑顔が、何故か心に引っ掛かる。  
作り笑いだと一目見て分かった。

何で分かったのかと問われれば解らないとしか言えないが。

「柳、透耶…」

あの鋭い目つきの男が恐らくそうなのだろう。

御堂も遊弦も彼の存在を知っているようだった。

碧の記憶には無いが、何処かで関わった筈なのだ。

でなければ、辻褄が合わない。

「碧さん！」

「遊弦…」

遊弦が自分の事を、『葉山さん』では無く『碧さん』と呼ぶように  
なったのは何時だろう。

小さな違和感は積み重なる。

「さっきの、返事なんですけど…」

「あ…うん、」

「一緒に、居ます…碧さんが望まなくなるまで…！」

真っ直ぐ伸ばされた手。

この手を取れば、何かが解る気がした。

「碧さんが望んでくれている間に、頑張りますから…」

「遊弦…」

「俺の方がいい男だって、碧さんが思うように！」

一方的な誓いであるが、それは有無を言わせない力を持って響く。  
碧にはただ頷く事しか出来なかった。

## #24：言い訳

「すみません、御堂さん…わざわざ来てもらって…」

「ええよ、俺が来たかっただけやし。」

退院の日。

車で迎えに来てくれたのは御堂だった。

実際の所、上司に迷惑を掛けては、と渋る碧を半ば強引に御堂が押し切る形ではあったが。

「遊弦も来る言うてごねててんけどな、仕事サボる勢いで。」

「あははっ、遊弦らしいですね。」

「撒いて来たったけどな。今頃拗ねとんちゃう？」

「目に浮かびますよ、その姿。」

他愛の無い話をしながら、2人は車に乗り込んだ。

エンジンが掛かり、車はゆっくり進み出す。

御堂の趣味なのか、洋楽のロックが軽快なリズムを刻み始めた。

CMで使われるメジャーな曲から、アルバムのみ収録のマイナー所まで様々な曲が流れる。

「好きなん？」

「え…」

「さっきから、楽しそうにしてたから…」

言われてから、碧は初めて自分が指でリズムを取っていた事に気づいた。

「何だか、懐かしい気がしたんです…」

「そうか、俺も好きやねん。」

御堂が煙草を一本くわえてから窓を開けた。  
少し冷たい風が髪を揺らす。

「なあ、葉山。ちょっと寄り道せえへん？」

「私は良いですけど御堂さんは大丈夫なんですか？」

「今日は1日有給取ったんや。葉山が嫌やなければ やけど…」

別に嫌な理由は無い。

今までだって、何度となく御堂とは食事に行ったりはしていた筈だ。  
なのに、何故かは解らないが胸はもやついていた。

「葉山…？」

「あ、いえ…御堂さんさえ良ければ。」

「俺は何時でも大歓迎やで。」

悪戯っ子のように御堂が笑う。  
釣られるように碧も笑った。

「んじゃ、行こか。」

「はい。」

車は信号を左折し、碧の家とは反対の進路をとる。

通り過ぎて行く景色を横目で見ながら、消えない違和感を誤魔化すよう碧は小さく溜め息を吐き出した。

一時間程走って、車は漸く止まった。

其処は海沿いにある小洒落た感じのレストラン。

「凄い…こんな所あったんですね！」

眼前に広がる青い海にはしゃぐ碧を見て、御堂は嬉しそうに微笑んだ。

「お気に召してもらえましたか？お嬢さん。」

「はい！」

嬉しそうに頷いた碧の手を、不意に御堂が引き寄せた。バランスを崩した体はあっさりその腕の中に収まる。

「御堂…さ、」

「こんな事ぐらいしか出来んで…ごめんな、」

耳に届く声は、驚く程弱々しかった。何時もの御堂からは想像もつかない。

「…上司って立場が無かったら良かった…そしたら…」

その言葉の続きは何時まで経っても聞こえなかった。不思議に思った碧は身を振ってその顔を見上げる。

御堂は今にも泣き出しそうな表情で、碧を見詰めていた。  
胸が重苦しい何かで潰されそうになる。

「御堂さん……」

「なんて、言い訳やな……」

御堂の腕が解かれ、離れていく温もり。

「また、セクハラしてもうたな。」なんて、冗談を言いながら彼は笑う。

痛々しいその笑顔に、碧は何も言うことが出来なかった。

## #25：レストラン

好きだ、と。

そう自覚したのは何時だっただろう。

初々しいリクルートスーツに身を包んで、真っ直ぐ自分を見上げてきたあの瞬間。

その時には、もう彼女に堕ちていたのかもしれない。

「御堂さん…？」

大きな目でじっと見詰められて。

心の奥底まで覗かれているような気分になる。

これ以上は、駄目だ。

「なんて、言い訳やな。」

咄嗟に誤魔化す。

誤魔化し切れていないのなんて分かっていたが、そうする他無かった。

半ば無理やり話を打ち切り、碧をレストランへと押し込む。

碧はまだ何か言いたげな表情ではあったが、御堂はそれに気付かな

いふりをした。

「いらつしゃいませ。御堂様。」

ウェイターが恭しく頭を下げ、二人を案内する。  
案内された座席は海が一望できる特等席だ。

「御堂さんは、良く来るんですか？」

「休みの日とか一人で寂しくな。オーナーが同級生やから、良おし  
てくれんねん。」

「全くだ。」

ドリンクを運んできた男が溜息を吐き出す。  
サングラスをかけ、髪をオールバックにした彼は何時見てもレスト  
ランのオーナーには見えない。  
せいぜい町のチンピラだ。

「お前なあ、そんなナリやから客付かへんねんで？」

「ホストみてえな、お前に言われたかねえな。関西弁。」

「酷！」

何時も通りのやり取り。

しかし、目の前に座る碧は目をまん丸くして二人を見ていた。

何処か可笑しな所があつたのだろうか、と御堂は不安になる。

「葉山…？」

「いえ…上司じゃない御堂さん見るの、なんか新鮮で…」

笑いだした碧に、御堂は拍子抜けした。  
嫌われた訳でないなら良い。  
釣られるように御堂も笑った。

「へえ、貴志のお気に入りって君か。」

「いや…そんな、」

「申し遅れたな、俺は松田忍。御堂の大学の時の同級生だ。」

「あつ、私は葉山碧です！御堂さんの会社の後輩で…」

深々とお辞儀をした碧に、忍が口元を綻ばせる。  
そして、流れるような動作でサングラスを外し胸ポケットに仕舞った。

彼の色の無い右目が露わになる。

それは彼の最大のコンプレックスだ。

珍しい事もある、と御堂は驚いた。

「可愛いじゃん。貴志なんかやめて、俺にしとかねえ？」

碧の顎を持ち上げて、艶っぽい声を出す忍。  
慌てて御堂は忍の手首を掴んだ。

「可愛い子をあんまりからかうモンやないで…？」

「本気だったら良いか？」

「阿呆！良いわけあるか！お前にナンパさせるために連れてきたん  
ちやうぞ！？」

碧から手を放すと忍は再びサングラスをかけ直した。

「男の嫉妬は見つともねえぞ？」

「わかつとるわ！」

碧のグラスにはワインを、御堂のグラスには葡萄ジュースをワザと  
らしくなみなみと注ぐ。

「ごゆつくり。」と言い残し忍は厨房へと消えていった。

「あかん。アイツは気に入った子には手え早い…」

「私を…？」

「めっちゃ気に入ったらしいわ。」

連れて来るんじゃないかった、と今更ながら後悔した。

忍は目が悪い代わりに、人の空気を読む事に関しては神がかってい

るのだ。

そんな彼が碧を気に入らない訳はない。

「良い人ですね、松田さん。」

「んー…まあな。基本的には良い奴やねんけど ドSやで?」

「誰がだ。」

料理を運んできた忍が御堂の椅子を蹴る。

「余計な事言うならお前にはやらん。」

「横暴や…」

「五月蠅い。」

何だかんだ言いながらも、忍はイタリアン料理を二人の前へ置いてくれた。

若干量が多いのが気になる。

食器が3人分に増えているのも。

そして案の定。

忍は椅子を引いて二人の間へ座った。

「何で座るん?」

「俺も昼飯まだなんだ。」

「裏で食えや…」

「俺の店だ。何処で食おうと俺の自由だろ?」

睨み合う御堂と忍。

碧がその空気を割るように呟いた。

「すごい美味しそう…頂いても良いんですか？」

キラキラと瞳を輝かせて料理を見詰めている碧。  
忍が思わず吹き出した。

「おう、食べ！自信作だ。」

「コイツ、料理の腕だけは確かやからな！」

「頂きます！」

目の前に置かれたパスタを一口食べて、碧が忍を見上げる。

「美味しい…！」

「…！」

本当に幸せそうに碧が笑う。

少しは償えたのだろうか。

心の奥底で燻る罪悪感を隠すように、御堂も目の前に置かれた料理を頬張った。

美味しい筈の料理は、何時もより味気なく感じた。

## #26：葛藤

食事が粗方終わり、ウェイターが器を下げていく。

忍が食後のデザートに、とミニタルトとコーヒーを運んできてくれた。

それはやはり美味しくて、碧は幸せそうに全て平らげた。

「本当に美味そうに食うな、アンタ。」

「本当に美味しいからですよ。」

「サンキュ。料理人にはこれ以上ない言葉だ。」

ぼんぽん、と碧の頭を撫でる忍。

それを恨めしそうな目で御堂が見詰めていた。

「葉山は俺の後輩やのに…忍は俺の友達やのに 俺だけ蚊帳の外ってなんかおかしくない!？」

「男の嫉妬は見苦しい。何度も言わすんじゃないよ。」

「アカン。泣きそうや。」

机に突っ伏す御堂を無視して、忍は碧を見詰める。

正面から見詰められて、少しドキリとしてしまう。

忍もサングラスで隠れてはいるが、整った顔立ちをしているからだ。

「なあ…、アンタさ、」

忍が何か言い掛けたその時、御堂の携帯電話が無遠慮に震えだした。

「会社からや…ちょっとごめんな、」

流石に無視する訳にはいかないのか、御堂は携帯を持って店を出て行った。

急に二人きりにされた事で碧は少し戸惑う。

忍の方は気にしていないようで、先程途切れさせられた続きを何事も無かったかのように話し出した。

「アンタさ、何か違和感とか感じるんじゃないか？」

「！！！」

自分の核を突かれ、碧は大きく目を見開いた。

「私の事、何か知ってるんですか…？」

「知らねえよ でも、なんとなく…今のアンタは偽物のような気がする。」

「私も、そんな気がするんです…何か一番大切な事を忘れてる…」

忍は何かを考え込むように、顎に手を当てる。  
そして、暫しの沈黙の後口を開いた。

「成る程な。」

「何か解ったんですか？」  
「まあな。」

忍はゆったりと笑ってみせた。

確信をもった言葉に、碧は思わず縋りつく。

突然立ち上がった反動で、椅子が大きく揺れた。

「教えてください！分かった事全部……！」

「落ち着けて、」

忍が碧の肩を押さえて、再び座らせた。  
宥めるように、その頭を優しく撫でる。

「慌てんな。」

「でも……」

「俺の憶測を此处で言うのは簡単だ。でも、それじゃあいけねえんだ。」

サングラス越しの瞳が真剣さを帯びて、碧を捉える。  
視線はもう逸らせなかった。

「アンタは今混乱してる……偽物の世界に放り込まれた気分だろ？」  
「はい……」

「でもアンタはアンタだ…そのままが良い。俺とこうして知り合ったように、これから出会えば良い。」

忍の言葉に目の前が晴れていくような気がした。

それは碧自身がずっと不安に感じていた事だったから。

見覚えのない男の見せた切ない表情。

遊弦の何かを誤魔化すような笑顔。

御堂の時折見せる悲しげな表情。

何処か腫れ物に触るかのように扱われ、不安は募っていくばかりでそんな時だったから、余計に忍の言葉はありがたかった。

そのままの自分で良い、と言われて。

「今忘れてても、本当に大切なものなら何時かきつと思ひ出す。大丈夫だ…」

「松田さん、ありがとう…」

「アンタの気持ち、何となく解るからな。」

忍が少し哀しげな笑みを浮かべた。

「俺の場合は少しずつ世界が消えていく恐怖だったが…まあ似たようなもんだな。自分は動けねえのに、周りはどうどん変わっていく。取り残された気持ちになる。」

「…はい、」

「けど、無理に変わらなくて良い…貴志がそう教えてくれた。なあ

？」

忍が碧の肩越しに、視線を向けた。  
捉えているのは戻ってきていた御堂だった。

「まったく…俺に偉そうな事言つといて、不安にさせてんじゃねえよ。」

「…すまん…」

頭を下げる御堂に、忍は呆れたように溜め息を吐き出す。  
そして再び碧に向き直ると、ポケットから名刺を取り出した。

「何かあつたらこれに連絡しろよ。」

「ありがとうございます…」

「ま、ナンパの意味も込めてな。」

もう一度碧の頭を撫でると、忍は厨房へと踵を返した。

御堂の横を通り過ぎる時、その肩に手を置き耳元へ口を寄せる。

何かを耳打ちしているようだったが、碧の位置からでは聞こえなかった。

御堂の表情が僅かに歪む。

何を言われたのかは解らないが、御堂にとっては痛い言葉だったのだらう。

しかし、それは一瞬の事で。

顔を上げた御堂は何時も通りの表情だった。

「帰るか、」

「…はい、」

彼もまた葛藤しているのだ。

碧は視線を落とし、前を歩く影を追いつけた。

## #27：好き

「遊弦」

「翔太！」

昼休み、社員食堂で遊弦に声を掛けてきたのは翔太だった。  
翔太は当たり前のように遊弦の前に陣取り、『いただきます』と手を合わせた。

「お、Aセット？良いな」

「売り切れてた？」

「ん。やっぱ12時でダッシュしねえと無理だよなあ。」

「だよな。」

Aセットのメインであるロースカツ。

遊弦はその最後の一切れを翔太の皿へと乗せた。  
不思議そうに翔太が遊弦を見上げた。

「やる。」

「サンキュ……てか、何かあった？元気無いじゃん。」

「……うん。まあ……」

気にかかる事は唯一つ。

今日休んでいるあの2人だ。

「あの人絡み？」

「…今まで…恋愛にこんな手こずった事無いんだけどさ…」

「嫌味な奴だなー」

「そう言うんじゃないくて！」

誤解を招く言い方だったようで、翔太が白い目で遊弦を見詰めた。  
慌てて遊弦は取り繕う。

「そうじゃないんだ…」

「？」

「俺、今まできつと本気の恋愛したことなかったんだよ…だから苦  
労したこともなかったんだ。」

碧を見ると苦しくなる。

その笑顔は独占出来ないものだから。

「どうすれば、あの人が幸せになるかなんて始めから解ってる。  
でも…」

「……遊弦……」

「頭では解ってても、駄目なんだ…俺も、御堂さんも。」

だから、苦しい。

碧の幸せには『柳透耶』という人物が必要不可欠で。しかし、柳と碧がうまくいくということは遊弦の想いは破れるということだ。

それは想像もしたくない現実。

遊弦は空っぽになった皿に視線を落とした。

いつか自分の心もこの皿のように空っぽになってしまうのだろうか。偉そうな啖呵を切って、結局は何も出来ないのでは無いか…思考が沈みかけた時、翔太がぼつりと呟いた。

「足掻くのは、悪い事かな…？」

「え…」

「何もせずにあっさり諦められる程度なら、最初っから好きにならなきゃ良い。それが出来ない程の気持ちだからみっともなく足掻くんだろ？」

翔太は貰ったカツを頬張りながら、箸で遊弦を差す。

「何かに執着してるお前、俺は結構好きだけどな。」

「翔太…」

「学生ン時、王子とか呼ばれてた時よりは今のが人間っぽいし。」

「それは…思い出したくもねえよ…」

「あはは。お前女子嫌いだったもんなあ…だから一目惚れとか言った時、吃驚した。」

「そう言えば…そう…か、」

ふ、と。

碧が何故自分にとって特別なのか解った気がした。

一目惚れしただけなら、柳が現れた時点で諦めていた。

こんなに彼女に執着する事は無かっただろう。

それでも諦められなかったのは、彼女が唯一自分の本質を見てくれる女性だったからだ。

外見でなく、遊弦の中身を。

「やっぱ、碧さんは 特別なんだよね…」

「ベタ惚れだな。」

「ああ…すっげー好き…」

自覚した恋心はもう今更消せない。

ならば、遊弦に出来るのは諦めない事だけ。  
叩いた大口を実行するしかないのだ。

「まだ、悩むけどさ…考えてみたら、俺にはそれしかねえんだよね…」

「まあ、諦めざるを得ないくらいフられたら慰めてやるよ。」

「縁起でもねえよ!」

未だ答は出ないが、それでも少しは気が楽になった気がする。  
遊弦は翔太に心の中で感謝した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5872s/>

---

Square

2011年10月30日17時14分発行